

100号記念 特別寄稿

私のオセアニア学ことはじめ その2

青柳まちこ (立教大学名誉教授)

1. 日本人による現地調査開始

私がホノルルを出発する直前、当時、神戸大学におられた石川栄吉先生からお手紙を頂いた。神戸大学で学術調査団を組んでマルケサス諸島に行くというお話で、ハワイ大学で、どなたかマルケサスに詳しい方はいないかといったお問い合わせだったように思う。この時は出発準備であたふたして、まったく石川先生のお役には立たなかったが、この頃になると、そろそろ文化人類学あるいは民族学の現地調査が始まっていたようである。

私の周辺で一番早く、かつ大規模な調査隊は、1958年8月～9月に出発した「日本民族学協会・東南アジア稲作民族文化総合調査団」で、慶応大学の松本信広先生を団長とする十数名のグループである。都立大大学院での友人綾部恒雄氏もメンバーに加わっていた。資金の調達に関しては、日本民族学協会の会長をしておられた渋沢敬三先生のお力に頼る所が大きかったようで、当時の記録を見ると、世話人として藤山愛一郎外務大臣はじめ、衆・参議院議員数名、経団連副会長、安田生命社長、第一生命社長といった政財界のお歴々が名前を連ね、岡先生は安田生命社長の竹村氏、経団連事務局次長の花村氏とともに、幹事を勤めておられた。竹村社長は都立大学大学院で一緒だった竹村卓二氏(故人・国立民族学博物館教授)のご父君である。調査団を支えるためのこの大がかりな組織作りは、終戦からまだ十余年しか経っていなかった貧しい日本で、海外調査が如何に大きな出来事であったかを如実に物語っているように見える。

ポリネシアで行われた最初の調査は、京都大学探検部による1960年のトンガ諸島の調査であろう。指導教官は大阪市立大学の藪内芳彦教授で、京大人文研の藤岡喜愛氏が副隊長、大学院生・学生併せて8名がメンバーであった。後の国立民族学博物館長石毛直道氏も考古学担当の学生としてこれに参加していた。

学生の組織である探検部がどのようにして資金集めをしたのか、よく分からないが、往路は大阪港から伴野通商の貨物船に便乗し1ヶ月、帰路はフィジーのスヴァからマグロ船に乗って1ヵ月半の航路で帰国したそうである。こうして交通費を浮かしたのであろう。おそらく次に来るのが大阪市立大学医学部のポリネシア学術調査団ではないだろうか。『民族学研究』(28-2:134)によれば、1961年8月から10月にかけて、自然人類学者の島五郎、鈴木誠、寺門之隆諸氏がサモアとニュージーランドで、マオリとモリオリの頭骨の研究をされたとある。

前述の神戸大学の南太平洋学術調査隊は、杉之原寿一、高木正孝、石川栄吉3人の研究者で構成され、1962年7月から10月にかけてマルケサス諸島のファツヒヴァ島を調査された。マルケサス諸島といえばゴーギャン終焉の地として知られるが、サッグスによれば、

ここでは紀元前2世紀に遡る遺物が発見されており、ポリネシア人拡散の中心地と位置付けられている。

この調査隊に事件が起こったのは1962年8月のことである。心理学者で神戸大学山岳部長の高木正孝助教授が、突然海上で行方不明になった。石川先生がその処理のために奔走されたという話をうかがったことがあるので、今回改めて奥様にお尋ねしたが、この件に関して書かれたものは残っていないとのことであった。ふと思いついて高木氏の著書『パタゴニア探検紀』(岩波文庫682、1968年)を探してみたら、神戸大学教授・日本山岳会の田中薫氏が序文でそのことに触れている。それによれば高木氏はマルケサス諸島のファツヒヴァ島を調査中、単身タヒチへ帰ることとなり、コブラ運搬船に便乗した。8月6日午前4時(現地時間)高木氏はその船の甲板から突如姿を消してしまったそうである。神戸大学では文学部長を現地に派遣し、あらゆる可能性を考え捜索したが、結局消息は掴めず、1年後に死亡がフランス裁判所で確定した。48歳であった。

高木氏は1953年マナスル登山隊にも参加し、58年には日本とチリの合同登山隊の隊長として、チリの未登攀アンアールレス山の登頂に成功した経験豊かな登山家であった。田中教授は山男が海へ出かけたことを疑問視しておられるが、長い髪を梳る美しいローレイの乙女が、登頂隊の隊長というもっとも冷徹な判断力の持主を、マルケサスの暗い波間にいざなったのであろうか。ハワイで石川先生からマルケサスに行くというお便りを頂いたこともあって、この事件は私にとってショッキングなニュースであった。

2. タヒチへ

ところで、ハワイ大学での1学期を終えると、私は次の目的地ニュージーランドに向かおうと考えていた。しかし先に述べた、大阪市立大学ポリネシア学術調査団の一員であった東大大学院の畑中幸子氏が、ツアモツ調査のため、調査団の帰国後もタヒチに留まってその準備をしていることを聞いていたので、先ず畑中さんを訪ねることにした。

出発前日は大学に日本語の成績提出をした後、夜遅くまでかかって荷造りをした。当日は朝から洗濯、アイロン掛け、昼はワイキキでティーチング・アシスタント仲間が催してくれた送別会に出席し、午後からはお世話になった方々の挨拶廻りなど、慌てふためいてようやく空港に到着した時はすでに薄暗くなっていた。送りに来てくださった友人・知人から贈られた薫り高いレイは、残念ながらゲイトを通った所で空港職員に取り上げられてしまった。

こうして1962年2月1日、午後6時20分私の乗ったエア・フランス機は滑走を始めた。目指す先はタヒチのパピエテ、飛行機は一路南下する。赤道を越えたのは何時か分からなかったが、時間からすれば9時半頃には南半球に入ったことになるのだろう。大昔ハワイ人が中央ポリネシアから北に向かった大航海とは逆方向である。

ほとんど揺れることもなく、高度を下げてきた機体が滑走路にぶつかる音がして飛行機は定刻通り11時50分、パピエテに到着した。空港はホノルルと比べると如何にも暗く、

湿気を含んだ生暖かい、ほんのりと甘い空気があたりに立ち込めていた。

入国の手続きが終わって建物の外に出ると、暗い中、畑中さんが立っているのが見えた。短く髪を切っているため少女のようである。傍に立っている白髪の日本人は、畑中さんがお世話になっている清野さんであると紹介された。二人はそれぞれティアレ・タヒチの白い花のレイを私の首に掛けて下さった。私は今晚から清野一家の居候の畑中さんのそのまた居候という身分となる。

3. 清野さん

清野さんは昔マカテア島の燐鉱山で働いていたとのことであった。マカテア型という言葉は、隆起サンゴ礁を表す名称として知っていたが、実はマカテアが何処にあるのか知らなかった。地図で見るとタヒチのほぼ真北にあり、散在するツアモツ諸島の島々の中ではタヒチに非常に近い。アトルの多いツアモツの中では珍しい隆起サンゴ礁の島で、1908年から燐鉱の採掘が開始されたという。ウィキペディアによれば、燐鉱石は1921年には三井物産によって日本にも輸出され、各地からの労働者で島の人口は2000人を超えていたそうである。日本人労働者も十数人を数え、第二次世界大戦中は抑留されていたが、戦後はタヒチなどに住み着き、1975年まで生存していたとある。まさにその一人が清野さんである。マカテアでの生活をお聞きしたかったが、居候の分際では出すぎたことかとうかがう機会がなかったのは残念であった。

清野家は6人、タヒチ人の奥さん、彼女と中国人の間に生まれた息子トゥピとその夫人、また清野夫人とフランス人の間に生まれた娘の子どもたち、つまり清野さんの義理の孫にあたるオデットとペペがいた。オデットもペペもすらりと伸びた手足、黒褐色の髪、高く通った鼻筋と美人・美男の条件を備えていた。オデットはパピエテのホテルの専属ダンサーで、時々ホテルから迎えが来る。職業柄容姿にはとくに気を使い、昼間はビキニ姿で海岸に行き、皮膚を美しくやくことに専心していた。振る舞いが貴婦人のようなので、私たちは彼女をオデット姫と呼んでいた。

ある時清野さんが、「日本の味はすっかり忘れてしまった」と言うので、畑中さんの提案で五目寿司を作ることになった。市場で人参とサヤインゲン、それに椎茸と豆腐を手に入れて、酢飯を炊き、材料を混ぜて、上から薄焼き卵と日本漁船から貰った海苔を細切りにして載せると一見それらしき物が出来上がった。私たちの副食は豆腐の味噌汁と茹でた青菜で、彼らには味噌汁の代わりにコーヒーをつけた。

トゥピは一口食べるとお釜に残っていた白いご飯を別の茶碗に盛り、酢飯をおかずにして食べ始めた。驚いたのはオデット姫の態度で、荒々しく席を立つと、一同に冷たい物を食べると体によくないと宣言し、自分用に目玉焼きを作り始めた。オデット姫の剣幕に恐れをなした私たちは、下を向いてただ黙々とタヒチ製の五目寿司を口に運んだ。

食後余った味噌汁を犬にやろうと外に出た。ぞろぞろ付いてきた4匹の犬は味噌汁をかけた白いご飯のにおいを嗅いだだけでそっけなく行ってしまった。昨今はお犬様が喜ぶさ

まざまのペット専用食品が売られているが、当時の日本では味噌汁をかけたご飯は、人間のみならず犬も大好物だったはずである。私たちの嗜好は、オデット姫ばかりではなく、この犬にも軽蔑されたようであった。清野家の犬は何時もコーヒーをがぶがぶ飲んでいて、犬がコーヒーを飲むなんてと思っていたが、コーヒーを飲む犬はフランスにはいるのだろうか。

清野家には、硬軟取り混ぜた週刊誌が山のようにある。清野さんは時々パピエテに立ち寄る日本漁船のタヒチ側機関との仲介役のような立場で、病人があれば医師に連れて行くなど、親身に世話をしておられたので、週刊誌や味噌、醤油はそのお礼だったようである。毎日の強い雨ですることもない日、畑中さんと私は週刊誌の中に日本への思いを馳せた。

4. モーレア島への旅

しかしせっかくタヒチまで来ながら、ブラブラしていても仕方がない。雨の中、モーレア島に出かけることに決心した。モーレア島で私の訪ねる相手Kellum氏は、この地方の有力者らしく、誰でもその名を知っている。第一次大戦後の1925年頃小さなスクーターで来島、ドイツ人から土地を購入してここでヴァニラとコプラのプランテーションを営んでいるようだ。

実は私はルアマラ先生の授業でマリマリ・ケラムと知り合いになった。彼女はケラム夫妻の娘さんである。講義が聞き取れない時、親切な彼女に私はノートを見せてもらっていたが、私がタヒチに行くと言うと、両親宛に私の紹介状を書いてくれ、これを持っていけば、両親があなたの面倒を見てくれるだろうと言う。

モーレア島はタヒチに次ぐ観光地で、タヒチの北西18キロ。毎日大小の船が交替で往復していた。大きい船は200フラン、小さい船は80フラン、私は船酔いが怖いので大きい船の日を選んだのだが、この日は風が強いので揺れるだろうと皆が話している。予想通り環礁の外に出ると船は猛烈に揺れ始めた。この時は酔い止めの薬がまったく効かず、ビニール袋を片手にひたすら島に着くことを念じた。

ようやくクック湾に到着すると、アメリカ人観光客は海沿いのホテルにいつせいに消えてしまった。港にとまっていたバスの運転手に行く先を告げると、そちらの方に行くというので、ともかくそのバスともトラックとも分からぬ乗り物に乗り込んだ。バスは海岸沿いの幅1メートルくらいの細い道を、半分海水に浸かりながら走る。30分ほど走ってから、運転手は「ここがケラム氏の家だよ」と指差し庭に入ったが、バスは止まらずにUターンしてまた道路を走り出す。理由がさっぱり分からずに、でも何とかなるだろうとそのまま車に乗っていると、4～5分走ってリュックを背負った一人の男性が降りた。この時になってようやく気づいたのであるが、私の相客は彼一人で、バスの中ではがやがやとしゃべっていた若者たちはすべて運転手の友人らしい。

慌てた私は急いで彼を呼びとめた。このアメリカ人考古学者マッケラン氏の説明によれば、ケラム夫妻はパピエテに行って2週間ほど不在で、家には誰もいないという。夢想だ

にしない事態に途方にくれていると、彼が一つの提案をしてくれた。この岬を廻ったパペトアイという場所に、ニュージーランドの考古学者グリーン氏が定宿にしているムッシュー・ナイの家がある。そこに行って泊めてもらえばよいだろうという。他に名案はないのでそれに従うことにした。

ついに乗客は私一人になってしまった。好奇心に満ちた人々が何かと話しかけてくる。「フランス語が出来るか?」「何歳だ?」「結婚しているか?」「今降りた人はあなたの夫か?」「中国人か?」。トンチンカンなフランス語の会話をしている間に、ナイ氏の家に着いてしまった。

5. ナイ家に宿泊

バスを降りると、ナイ夫人初め大勢の人々が寄ってきて、私を取り巻く。「私はマドモアゼル・ケラムの友人です。今日ここへ彼女のお父さんのムッシュー・ケラムを訪ねて来ました。しかし彼はパピエテに行って留守でした」ここまでは私のフランス語は何とか通じたらしく、皆うなずいて聞いてくれた。しかし次がいけない。「私が困っていると、アメリカ人の考古学者がムッシュー・ナイの家に行けば、万事うまく取り計らってくれるであろう。彼は有識者ですばらしいタヒチ人であると言っていたので、私はここに来た」という意味のことを言いたかったのであるが、私の乏しいフランス語の語彙では、どう組み合わせても相手に通じない。一同、私の口元を凝視している。落ち着け落ち着けと自分に言い聞かせ、フランス語会話の本を取り出して、訪問というページを開けて例文を探すが、こんな例文は見当たらない。

船酔いのため、私はひどく疲れていた。状況説明を諦めて、「ムッシュー・ナイが帰宅するまで少し休ませてください」と言うと、ナイ夫人は了承したらしく、家に招き入れてくれた。昼食をご馳走になり、ベッドに案内してくれたので、私は倒れこんで夕方まで眠ってしまった。

日が落ちた頃、目を覚ますとナイ氏が帰宅してパンの実を取っていた。数年前にハーバート大学の人類学調査隊がこの家を拠点として調査を行ったし、現在もニュージーランドの考古学チームの発掘を手助けしているそうで、学会の状況には詳しくあった。私の飛び込みの理由も理解してくれたようであった。

ここパペトアイは、モーレア島東北端に位置し、人家は120戸ほどある大きな村である。何時も怒ったように見えるナイ夫人は、とくに不機嫌なわけではなく親切であった。彼女の父は中国人、母はタヒチ人だという。何故か中国人とポリネシア人の混血の場合、こうした顔つきの人が多いように思えた。中国人の無表情さと年とったタヒチ人のいかつさといったものが入り混じって、こんな感じを与えるのであろうか。子どもは6人、いずれも可愛らしいが、あまりに強引に抱いて欲しいとせがむのには、私の方が悲鳴をあげた。

この家は外国人が宿泊することが多いだけに、食事時には白布のテーブル掛け、純白のナプキン、ナイフにフォーク、冷水のグラスが並び、ナイ夫人が傍に座って「沢山食べな

さいよ」と毎回給仕してくれる。周囲の情景とは何となく不釣り合いな感があった。

2日目の夜、大雨について、例のマッケラン氏と、もう一人雲つくような大男が現れて、この家に泊まることになった。明朝、パピエテ行きの船が出るので、それで帰るといふ。私もその船で帰ることに決め、その夜は皆とヒナノというタヒチ産のビールで乾杯した。

翌朝暗いうちに波止場に行くと、情けないほどの小さい船で、乗客は20人ばかり、必死になって逃げようともがく豚を、無理やりに船に押し込んでいる人もいる。環礁の外に出ると案の定船は揺れ出したが、今回はマッケラン氏から貰った酔い止め薬が効いて、すぐに睡魔に襲われ、とろとろしているうちにパピエテの港に到着した。

そこで思いがけなく、港で私を待っていて下さったケラム夫妻に紹介された。現在のモーレア観光案内によれば、コロニアル風のケラム邸とその庭園は、観光スポットになっていて事前に連絡すれば見学できるらしい。ケラム夫妻は亡くなり、あのハワイ大学で一緒だったマリマリ嬢がその邸を管理しているようだ。

タヒチでの2週間の滞在を終えて出発する時、清野さんと畑中さんは空港に送りに来て下さった。タヒチ流に抱き合い、清野さんの幾分伸びた髭に頬擦りすると、私は涙が止まらなくなって隠すのに骨を折った。畑中さんはその後、念願のツアモツ諸島に渡り、プカルア島で調査を行ったことは、『南太平洋の環礁にて』（岩波新書653）に詳しい。

6. ニューカレドニアへ

タヒチからニュージーランドへ行く前にニューカレドニアに立ち寄ることは、ホノルルで、サウス・パシフィック・コミッションのジャック・バロー博士にお会いした時に決めていた。真夜中にパピエテ空港を出発したエア・フランスはフィジー経由で一路西に向かう。2月18日の夜が明けて、下に大きな島が見えてきた。やっぱりメラネシアの島は大きいなどと、妙な感心をしているうちに飛行機は高度を下げ、トンツータの飛行場に滑らかに着陸した。

空港にはバロー博士が待っていて下さり、「今日の午後からキャンプに行くよう手配してあるが疲れていないか」と聞く。バロー氏は植物の専門家、ホノルルで紹介された時も、手帳に私の名前を書きこみその横にタロと書いた。「私はタロ芋ではありません」と言うと、「そんなことは分かっているけれど、こうしておけば忘れないから」と言われる。他人の名前はすべて植物と結びつけて記憶するらしい。

太平洋の植物と農業の専門家、ビショップ博物館のシリーズから英語で出版された『Subsistence Agriculture in Melanesia』（1958）、『Subsistence Agriculture in Polynesia and Micronesia』（1961）は、後年私自身が講義をするようになってから実によく利用させていただいた。一寸ユーモアのある挿絵と分かりやすい記述が特徴的である。バロー家は彼の6代前にフランスから移住してきたそうで、彼の父はメゾン・バローという貿易商会を経営し、ニューカレドニアの実力者だという話である。

空港から東南に向かって1時間ばかりでヌメアに着く。丘に沿って明るい色彩の家々が

立ち並ぶ南国風の本当に美しい町である。車はそのまま彼の秘書ミス友野の家に着いた。ミス友野の父はニッケル鉱山の契約労働者として来島し、後に洋服屋を営んでいた日本人で、母はフランス人、肌の透き通るような美しい女性である。

出発は夕方、同行者はもう一人、ミス・ゲイスラーという女性である。トンツータの空港を過ぎて、まっすぐ海岸沿いに走り、夕方かなり遅くブルパリという村に着いた。ホテルで夕食を取り、海岸にテントを張ることにする。この海岸は見渡す限り白砂で、音もなく波が寄せている。波があまりにも静かなので、足が水に濡れても気がつかないほどであった。

翌朝は進路を北に取り、山を越えてひた走り、北側の海岸に出てきた。この日の目的地は西部の最大の町ヤンゲンで、病院、警察、ホテルなどがある。ミス・ゲイスラーはサウス・パシフィック・コミッションの雑誌のために、病院関連の写真を撮る必要があった。

海岸沿いの道路を西に向かって走り、その間に幾つかの大きな川を渡った。川の両岸にロープが渡してあり、そこに筏が結び付けてある。車をその筏に載せると、カレドニア人二人が組になり筏を向こう岸までロープ伝いに動かして行く。筏がこちら側の岸にない時には、車の警笛を鳴らすと何処からともなく渡し守が出てきて、ゆったりとこちら側の岸に筏がやって来る。たいへんのどかな楽しい風景であった。ちなみにこの渡し守たちは、政府に雇用されている役人だそうだ。

ヤンゲンに着いたのは午後4時頃、ミス・ゲイスラーに気の毒なことには、彼女が対象とする女性は現在は一人もいないとのこと、では今夜はどこに泊ろうかという話になった時、病院のカロル医師の勧めで、6キロほど離れたカレドニア人の部落に行くことになった。彼のジープの後に付いて、うす暗くなって村に到着し、カロル医師の知り合い、カリリエ氏の庭先にテントを張ってから、近くの川に水浴びに行く。長い道のりの埃を落とし、さっぱりして夕食をとる頃には二人のお嬢さん方は至極陽気になった。彼女たちは実によく飲む。二人でブドウ酒1本を空け、さらに各自ビールを飲む。普段でも彼女たちは朝食以外は、昼も夜も食前酒を飲んでいるらしい。ほとんど飲めない私が一人先にベッドに倒れこむと、二人はケラケラ笑って、「それではヌメアに住めないね」とからかう。

7. 日本人か？

翌朝、朝食をカリリエ家で食べたが、ふと皿をひっくり返してみたら裏側に **made in Japan** と書いてあった。午前中彼の案内で村内を散歩すると、一面のコーヒー畑である。彼は1200キロほどのコーヒー豆を収穫し、1キロ60フランほどで市場に出しているそうだ。父は5000キロあまり出荷しているという。

カリリエ氏は私と並んで歩きながら「フランス人か？」と聞く。「いいえ」と答えると、「ではイギリス人か？」と聞く。再び否定すると、今度は私の顔をまじまじと眺めて「ジャポネだ」と言う。そして日本人についていろいろ話し出した。戦前にはこの島に沢山の日本人がいた。皆よい人たちで、実によく働いていた。戦争中には多くの日本人が手

を縛られてどこかへ連れて行かれた。ここから1キロほど離れた場所に田中サン（サンという敬称をつけていた）が住んでおり、やはりコーヒーを出荷している。彼の奥さんはこの人で、子どもたちは皆私のような皮膚の色をしているようだ。帰り道是非この田中サンに会ってみたかったが、時間がないということで寄り道できなかつたのは残念である。

午前10時頃、ヤングンの町に戻り、ミス・ゲイスラーの用事で警察に寄る。警察の建物の中に収監する部屋が三つあったが、拘留されている人は誰も居なかつた。警察で働いていた二人のカレドニア人は、私を見てすぐに「ジャポネ」だと言う。ヤングンには田中サンの他にもう一人ジャポネが居るようだ。タヒチとは異なり、ここでは中国人に間違えられたことは一度もなかつたが、たしかに戦前ニッケル採掘に従事するため、ニューカレドニアに渡航した日本人の数は5,600人にも及んだという。ヌメアに入る道の左手にある美しい墓地の中に、「日本人の墓」と刻まれた大きな墓石があり、裏側には亡くなられた方々の名が書かれてあつた。

後日ヌメアで訪ねた筒井さんも、父は日本人、この地でフランス人の母と結婚したそうで、筒井さん自身は少年時代を神戸で過ごしたという。筒井夫人は柔らかな関西弁を話す日本人であつた。ここある多くの日本商社の駐在員たちのほとんどすべてが、筒井夫妻のお世話になっているようだ。

8. カレドニア人の墓地

再び病院を訪れ、カロール医師と夫人に挨拶する。彼らがここから10キロばかり離れたヤングンの谷の中に、カレドニア人の昔の墓地があるから、行ってみないかと誘って下さつた。大柄で精力的に休みなく話している夫人の運転するジープで、山中に入る。途中で車を止めツルツルした岩山を登ることになった。カロール博士を先頭に、夫人、私、ミス友野、ミス・ゲイスラーの順で、カロール博士が支えてくれている綱を頼りに裸足で岩をよじ登る。岩の3分の2ほど上がった所で岩が棚状になっていた。この棚の上に白骨化した頭骨が20ばかり並べてある。骨はすべて完全な物で、非常に長頭のように見えた。「これひとつ日本にお土産に持って帰ったら」カロール博士が冗談とも真面目ともつかない顔で、頭骨を指差す。

一層険しくなつた岩をさらに上に登ると、頂上に近い所に洞穴があり骨が散在していた。カロール博士の話では、この墓地は大体150年位前のもので、死体は植物繊維で編んだ籠に入れて屈葬し、放置しておくのだそうだ。骨の周辺にはその籠に使用された植物も散乱していた。やがて骨だけになると、頭部だけとって先に見た棚に並べるのだと言う。

墓地の見学でくたくたに疲れた私たちは、病院の横手にあるカロール博士の自宅で昼飯をご馳走になつた。博士はこれまで日本に二度も行つたことがあるそうで、主に西日本を旅行したので、今回は北海道に行こうと考えているようだ。そして私の根付のコレクションを見て欲しいと、桐の箱を大切に抱えてきた。中には象牙製品や象嵌の細工などかなり沢山の根付が入つていたが、私に見る目がないので会話が續かなかつたのは残念であつ

た。

午後はさらに海岸に向かう。ノートルダムを少し越えた所で、車の通れる道はなくなったので、徒歩で海岸に降り、カレドニア人の古い岩絵を見た。帰路海岸から道路に戻る途中で、カロール博士とミス友野が蜂に刺された。先ほどの墓地ではミス・ゲイスラーが蜂に刺されているので、一同は墓地に踏み込んだり、神聖な岩絵を見に行ったりした罰だという。そして私だけは異邦人だから蜂も遠慮し、無事だったのだそうだ。

病院に戻ると午後の太陽が傾きかけている。明日までにはヌメアに帰らなければならない。カロール夫妻に名残を惜しみながら再びもと来た道をひた走りに走る。メイン道路は道幅も広く快調だが、時折目の前に鶏が飛び出して、運転している彼女たちを驚かせる。

日が暮れて、川の渡し守は家に帰ってしまったらしく、何度か警笛を鳴らして根気よく待たなければならなかった。最後の一番大きな川に到達した時には、もう完全に真っ暗になっていた。風も強く夜目にも水が河口に向かってごうごうと烈しく流れているのが見える。「フェリーを支えているたった一本のこのロープが切れたら、私たちは間違いなく海に行くはずだ」と私が言ったら、彼女たちは「そうだ、海に行ったら車の窓からサメを見物しよう」と口だけは呑気なことを言っていたが、正直の所、彼女たちも私同様に心細かったに違いない。

ようやくの思いで川を渡り切ると、風ばかりでなく雨も烈しくなってきた。これでは海岸でのキャンプは無理だということで、その夜はウアイルーの町のホテルに泊った。何かフランス映画に出てくるような、一寸疲れた感じの中年の女性が部屋に案内してくれた。翌朝も烈しい雨、しかし山の中をひた走り南海岸に出て、3時半頃ヌメアに無事帰ることができた。

ヤンゲンには多くのカレドニア人の部落があった。私たちが走っていると彼らは愛想よく手を振ってくれた。ミス・友野もミス・ゲイスラーも、フランス人とカレドニア人との関係は非常に良好だと言う。しかし異人種間の結婚は殆どない。その理由は殆どのカレドニア人は村に住んでおり、接触の機会がないこと、また生活様式が違うから結婚は無理だとの説明であった。ヌメアの街中で見かけるメラネシア人は、ロヤリティ諸島から来た人々だそうである。実際この当時は1980年代になって、カナクの烈しい独立運動が起きるなどということは、人々はまったく考えていなかったようである。

ニューカレドニアに来てひとつ私自身が目新しく思ったことは、ヤンゲンまでのどこの町に行っても医師や警官、ホテルの経営者などがすべてフランス人だったことである。これは同じフランス領のタヒチなどでは考えられないことであった。

9. 壮大なタロ芋田

翌日の午後、バロー博士がヌメア北西のムー山のタロ田を見に連れて行って下さった。山頂から段が幾重にも重なり、日本の棚田を思わせる壮大なタロ田である。それでも現在は昔ほど盛んではないとのことであった。それは食生活の変化と、棚田を作るための

男性労働力の不足である。しかし遠い山の頂から鉄管で水を運び灌漑しているような手の込んだタロ芋耕作は、これまで、またこれ以後訪れたトンガやパラオでも見たことのない方法であった。もっとも簡単な灌漑は溝を掘って水を高い所から低い所に流し、その流れに沿ってタロ芋を植えつけていたそうである。このタロ芋はこの地の原種でいわゆるウエット・タロであるが、近年はこれに加えてハワイなどから水を必要としないドライ・タロも入ってきた。ドライ・タロはやや葉の色が濃く大きめで、丈も高いように見えた。タロ芋耕作は棚田を作る時を除いて、女性の仕事で男性は手を出さない。

一方ヤム芋耕作は男性の仕事である。道の傍らにあったヤム芋の畑をバロー博士は、ドライガーデンの典型だと指し示してくれたが、そこにはヤム芋の他、バナナ、豆、タピオカなどが混じって植えられていた。暑い日、山を登ったり降りたり、バロー博士が汗びっしょりになっているのが気の毒であった。

その翌日は漁業関係の専門家の案内で博物館を訪ねた。この博物館のメラネシア関係、とくにニューカレドニアに関する収集品は豊富である。近々建て直すそうで、博物館に勤めるカレドニア人の青年は、「新しくなったらまた来て下さい」と愛想がよい。水族館は熱帯魚の収集では有名だそうであるが、当日は閉館していて、彼らは私以上に残念がってくれた。

この日の夕方、日本商社の駐在員の一人、飯ヶ谷さんとレモンシトロンという海辺に泳ぎに行った。白砂の砂浜に何と形容してよいか分からないほど美しい穏やかな海が連なり、その果てに夕日が沈んで行くさまは最高の風景で、まさに「天国に一番近い島」(まだその頃、ニューカレドニアはそう呼ばれていなかったが)であった。ただし少し沖合いにブイのような物が浮いており、これはサメ侵入防止の網だそうである。

バロー博士のお陰で短期間の滞在ながら、きわめて有益な1週間を終え、2月25日朝、私はまたトンツータ空港を後にした。次の目的地はいよいよニュージーランドである。

(続く)